



「百万一心」で復興、再生を

レンゴー社長 大坪 清

東日本大震災の余波が続いている。私がトップを務めるレンゴーでは、仙台港地区にあった仙台工場が、地震と津波で壊滅的な被害を受け、いち早く内陸部での再建を決断した。既に6月17日に安全祈願祭を済ませ、今年度中の完成を目指し、急ピッチで取り組んでいる。

従業員の雇用確保が第一義だが、宮城県、そして東北地方の大震災からの復旧、復興、再生に向けて、その先導役としてできる限りのことをしたいとの思いにも、駆られてのことだった。

仙台工場で生産される段ボールは、物の移動には欠かせない包装材料として、地域経済と密接につながっている。言わば中身と外身という表裏一体の関係だ。その段ボールがいち早く再生への動きを加速することで、地元経済復興への刺激にもなれば、これ以上の喜びはない。

東北の人たちの故郷への愛着は非常に強い。ドイツの社会学者テンニースは、社会の発展段

階として、ゲマインシャフト(地域共同体)から、ゲゼルシャフト(利益共同体)へ移行すると提唱したが、東北はゲマインシャフト的な地縁、血縁に基づく地域共同体が脈々と息づいており、復興に当たっては、その視点からの配慮が必要となろう。企業経営においてはもちろんだが、政府にはこの点への配慮がいささか欠けているくらいがある。

私は、大震災発生後、何よりもまず人命尊重を第一に、復旧、復興に取り組んできたが、人命の次は、人心の安定が必要だ。それは何よりも雇用の確保であり、新工場を即座に建設するという決断を下したのも、全従業員の人心安定が念頭にある。

震災復興に当たって大切なことは、全要素生産性を上げるということだろう。すなわち、資本生産性、労働生産性といった数字で表せる部分に加え、経営者のマインドや従業員のモチベーションという心にかかわる部分がとても重要となってくる。

ひとつの言葉を紹介したい。戦国時代、毛利元就が吉田郡山城築城の際、人柱の代わりに用いた石碑に書かれていた「百万一心」という言葉だ。百万一心は「二日一力一心」とも読め、「皆で力を合わせれば、何事も成し得る」という意味である。これはケインズの言う「アニマルスピリッツ」にも通ずると思っている。すなわち、明るく、陽気に、遅し

くということだ。福島県南相馬市にあるレンゴーのグループ会社である丸三製紙は、震災以降操業を停止していたが、一足先に6月20日から操業を再開した。散り散りに避難していた従業員全員が、再び自分の職場へと復帰し、皆、目を輝かせて仕事に取り組んでいる。人が人として生きることの何たるか、そして生産性の原点を教えられる思いだ。

明るく、陽気で、遅しく、「百万一心」の気持ちで復興、再生に取り組み、子どもたちに胸を張れる未来を残したいものである。

本連載は、大坪清、海江田万里、北川正恭、茂木友三郎、清田瞭、平沼赳夫の各氏が担当します